

島の怪談

いちは

つい最近、この島で、二件続けて小型漁船の遭難事故があった。

どちらも、夜中に一人で漁に出て、朝になっても帰ってこないで騒動になった。

一件目では船は見つかったものの、乗っていた漁師は見つからなかった。

二件目は、無事に救出されたものの、以後、漁には出たがらなくなったという。

生死の境をさまようような遭難をしたのだから当然だ、と周囲の人は考えた。

しかし、どうやらそういう理由ではないらしい。

漁師の語ったところは、こうである。

夜の海で、自分の位置を見失った。

あつい雲にさえぎられて、月明かりも届かない。

少し霧も出たせいか、島影すら見えない。

初夏とはいえ、海の上、少し肌寒くなってきた。

無闇と動きまわると、燃料を使いきってしまい危険だ。

エンジンを切って、甲板に寝ころんだ。

朝までこのまま待とう、そう腹をくくったときだった。

「おーい」

遠くで人の声。

いやまさか。

風か。

それとも波の音か。

「おーい」

また。

今度は、少し近い。

風でも波でもない。

明らかに。

「おーい」

人の声。

それも、さっきよりさらに近い。

上半身を起こした。

救助か。

いや、それはない。

朝になっても帰らない船が遭難と判断されるのだから。

まだ自分は遭難したことにはなっていないはずだ。

となれば、この声はいったい。

「おーい」

それに、この声は、聞き覚えがある。

あたりを見渡すと、また、

「おーい」

声のするほうを見た。

いた。

この前、遭難した男。

漁師仲間だった。

彼が、いた。

海の上に。

立っていた。

「おーい、おい、おい、こっち、こっち、こっち来い」

笑いながら、彼はそう言った。

手まねきまでしていた。

ぞぞぞ、と、全身の毛穴が立ち上がるのが分かった。

顔をそむけた。

目を閉じた。

それでも、声は聞こえてきた。

「おい、ほら、おい、ほら」

波の音に合わせるかのように、リズムカルに。

屈託なく、明るい声で。

「こっちに来い、ほら、こっちに来い」

耳をふさいだ。

頭を振った。

幻覚だ、妄想だ。

やめてくれやめてくれやめてくれ。

それでも、かすかに声が聞こえる。

「おいほら、おいほら、こっち来い、ほら、こっちに来い」

とにかくひたすら耳を押さえ、目を閉じ、甲板にうつ伏せた。

どれくらい経っただろうか。

ふと気づくと、声が聞こえなくなっていた。

おそるおそる、耳から手をはなした。

声は、聞こえない。

目を閉じたまま、頭を上げた。

ゆっくり、ゆっくりと、薄目を開けた。

そこには。

海の上には。

数えきれないくらい人がいた。

皆、笑顔で手招きしていた。

何年か前に遭難した近所の爺さんもいた。

子どものころ、海で溺れて死体があがらなかった友人の姿もあった。

あまりの現実離れした光景に、ふっと自分を見失った。

みんな、笑っているじゃないか。

「おい、ほら、こっち、ほら、ほら、こっち、こっち来いって、こっち来い」

祭り囃子のようにさえ聞こえる。

なんだ。

楽しそうじゃないか。

俺も。

腰を上げかけた時、少し大きな波で船が揺れた。

よろめいて、尻もちをついた。

尾てい骨に響いた痛さで、我に返った。

危なかった。

もう少しで。

落ちていた。

恐怖心と怒りとを混ぜて、彼らを睨みつけると、

こいつら……、なんて顔をしてやがる。

もう、誰も笑ってはいなかった。

怒り顔でもない。

泣き顔でも、悔しそうな顔でもない。

これは、そう、漁協の宴会のときの、乾杯待ちの顔だ。

酒を飲むのが待ち遠しくてたまらない、そんな時の、ソワソワ、ワクワクした表情。

待ってやがる。

俺が落ちるのを。

釣り針で指先を突いた。

叫びながら、何回も何回も。

自分を見失わないように。

我を忘れないように。

朝が来るまで、彼は指先だけでなく体中を刺し貫いた。

救助されたとき、服に広がった血の染みは、赤い水玉模様となっていた。